

ボランティア活動の可能性から大学と地域との 連携をめざして

～2007年度西濃地域ボランティア学習大会報告～

樋下田 邦子*

はじめに

ボランティア活動は、他人同士がいろいろな場でふれあい、つながりを持ち、お互いに学びあって生きる喜びを確かめ合う機会を与えるものであり、それが結果として社会の役に立つことになり、豊かで潤いのある社会づくりにつながると考えられている。同時に、ボランティア活動をするには、さまざまな知識・技術が身につく、いろいろな問題に直面してその解決方法を見出すこと、他人や自然を慈しむ心が育つなど、ボランティア活動自体が大きな教育効果を持ち、福祉社会を担う人材の育成に寄与するといえる。

一方では、少子化社会の影響を受けて一部の私立大学では、定員割れが生じ、本大学においても同様の状況がみられる。そこで、これからは地域に求められる大学の独自性をアピールできる教育、地域が求める教育や活動のあり方を考え、実践する時期にきていると考える。また、4年間の大学生生活に目を向けてみると、自分の持つ力や可能性に気づかず、偏差値というレッテルを貼られたまま卒業する学生も少なくない。学生はボランティア活動を体験して自らの持つ力に気づき、自分を好きになり、自分の可能性、自分の生き方、地域社会を見る力を獲得することが可能になると思われる。

これまで、ボランティア活動は、特別な人々による活動、「弱者に対して何かやってあげる」と理解されていたが、阪神大震災などの自然災害等をきっかけとして、ボランティアをめぐる気運が急激に高まり、今、人々の意識の中にボランティア活動に参加することは、特別なことではなく当たり前のこととして定着してきている。

ボランティア活動は、自らが楽しみ、自分ができることを気負うことなく始めることができる。同時に、多くの地域住民との出会いは、地域の状況を把握する機会を得ることができる。本学は、その基本理念の一つとして「地域との共生」を掲げており、様々な形で地域連携を進めてきたところであり、今後もより一層これを進めていく必要があると思われる。

以上の状況を踏まえて、第1回西濃地域ボランティア学習大会を開催し、「ボランティア活動の可能性から大学と地域と連携のあり方」の足がかりにしたいと考える。

2007年第1回西濃地域ボランティア学習大会の開催目的

今大会は、第1回ということもあり、ボランティア活動団体が互いの活動を理解し、活動の楽しさと普遍性を共有し、協働の方法について考えることを目的にした。テーマは「自分の可能性を発揮できるボランティア活動—ボランティア団体と地域における連携・協働をめざして—」とし、高校生、大学生、社会人までが集結し情報交換する場を本学にした。

小中高の学校関係者、大学・研究機関の方々、高校生・大学生・大学院生、社会教育関係者、ボランティア推進機関や市民活動非営利組織を支えるの方々、地域のボランティア活動者など、多様な社会的ステージでボランティアに関わるの方々のご参加を呼びかけます。

地域課題、社会課題に目を向け、その解決に向けて取り組むことは、社会性を養い、将来の自立した社会の構成員となるために

は非常に重要な体験となります。

西濃地域ボランティア学習大会
開催要領の一部を掲載

日程及び当日の進行

日程

9月29日（土）13時00分～17時15分

（大会終了後、ボランティア活動団体関係者のための交流会を開催します。）

参加対象

ボランティアに興味のある方ならどなたでもOK。

会場

岐阜経済大学講堂（7号館。記念講演、分科会会場）、8201教室（8号館2階。分科会会場）、
Student Plaza 内ミニホール（3号館1階。分科会会場）

参加費

無料

スケジュール

12時30分 受付

13時 開会式

13時15分 記念講演

「ボランティアリズムとは何か～ボランティア活動の独自性を追求して～」

講師：高森敬久氏（愛知県立大学名誉教授・大阪ボランティア協会理事）

14時15分 分科会：ボランティア団体の活動報告（3会場で、17団体が報告。詳細次頁を参照
ください。）

17時 まとめ・総括 高森 敬久 氏

17時15分 閉会

17時30分 交流会（ボランティア活動団体関係者のみ）

19時 交流会終了

主催

岐阜経済大学地域経済研究所・西濃地域ボランティア学習大会実行委員会

後援

岐阜県・岐阜県社会福祉協議会・大垣市・大垣市社会福祉協議会
揖斐川町社会福祉協議会・大垣商工会議所

分科会発表団体一覧

○講堂（7号館）

発表団体	テーマ	発表形態
岐阜経済大学 HIGE☆BU	何でもアリがHIGE☆BU ～引き出しがたくさん～	パワーポイント
揖斐高等学校 生活環境科	身近なことからボランティア ～地域と共に生きる～	パワーポイント
海津明誠高等学校 家庭科	高齢者との交流を通して	パワーポイント
要約筆記サークル 水ふうせん	中途障害・難聴者の社会参加のお手伝いを	パワーポイント
車椅子レクダンス普及会	勇気を出そう・今の自分に・・・	パワーポイント

○Student Plaza ミニホール（3号館1階）

発表団体	テーマ	発表形態
大垣女子短期大学 幼児科	発達障がい児のボランティアに参加して・・・	パワーポイント
大垣養老高等学校 家庭科	私たちのボランティア・大垣養老からの発信！！	パワーポイント
大垣市社会福祉協議会 Step by Step	Step by Step ができるまで	パワーポイント・劇
パソコン要約筆記サークル おもちゃ箱	ユニバーサルサービスになる「パソコン要約筆記」	パワーポイント
ゆうクラブ	地域の子供を通して思うこと	デモンストレーション
J Aにしみの女性部	まめやかな運動と豆腐作り	パワーポイント

○8201教室（8号館2階）

発表団体	テーマ	発表形態
岐阜経済大学 スポーツ経営学科	スポーツを使ったボランティアだってある	パワーポイント
大垣桜高等学校 生活科	高校生ができるボランティア活動	パワーポイント
カモミールの会	理解する気持ちと正しい知識 そして差別しない 勇気を	パワーポイント
大垣ジュニアリーダーズクラブ	大垣ジュニアリーダーズクラブの活動紹介	パワーポイント
J Aにしみの女性部	親子と一緒に食を育てる	パワーポイント
社会福祉法人新生活 サンビレッジ大垣	福祉教育の実践の場としての福祉施設の役割 ～夏休みの自由研究をきっかけとして～	パワーポイント

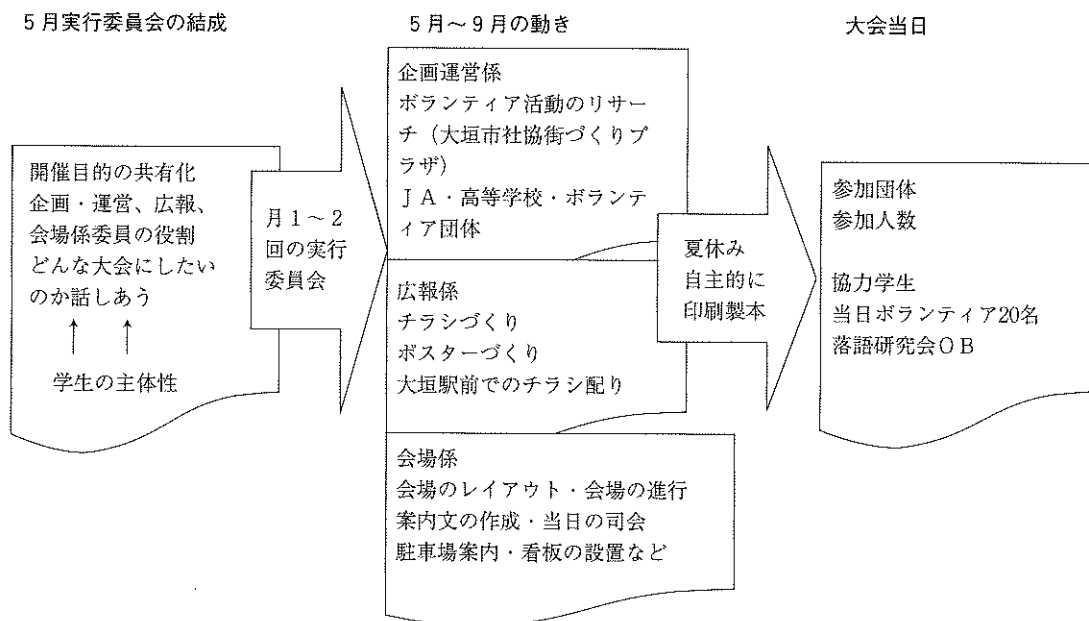
方法

学生による実行委員会を立ち上げる。学生の視点を取り入れ手作りの大会にすること。実行委員会メンバーが主体となりリサーチ、企画、広報、運営する仕組みにする。学部を横断的にとらえ実行委員メンバーの募集をすすめる。

その結果、HIGE☆BUメンバー9名（コミュニティ福祉政策学科7名・スポーツ経営学科2名）を中心に、経済学科2名、スポーツ経営

学科2名、コミュニティ福祉政策学科4名合計17名の学生が集結した。どのようなボランティア学習大会にしたいのか、報告してほしいボランティア活動には何があるのか、「企画・運営、広報、会場係」に分かれてリサーチを開始した。

実行委員メンバーは、ボランティアとは「困った人に何かをやってあげる」という一般的な概念にとらわれず、私たちの生活に密着した活動と位置づけて「食を伝える文化活動」から「子



ども、高齢者、障がいを持った方への活動」をリサーチした。学生の新鮮でかつ斬新なボランティア活動のとらえかたは、さまざまなボランティア団体へのリサーチをすすめる力になっていったといえる。さまざまな活動団体との出会い、そこでのコミュニケーションをとおして自分の可能性、自分の生き方、地域社会を見る力を養うことになったといえるだろう。

学生が地域に出向く意義は、講義で学ぶ理論を振り返り今後の学業意欲に結び付くだけでなく、ひとりの人間としての生き方を考える機会を持つことができる点である。200名の参加者で開催できた大会は、学生ひとり一人自信につながっていった。それは、大会終了後に行われた実行委員会での反省会における学生自身の言葉が物語っている。

その一部を紹介すると「また来年もやりたい」、「大学の恒例行事にしたい」、「学生がやるから楽しい」、「規則にとらわれない方法がよい」、「多くの人に出会えたことが良かった」、「ボランティア活動のとらえ方が変わった」などがある。初めての試みであり不安がいっぱいでスタートした実行委員会であったが、学生が主体的に参加することで達成感を持つことができた。

学生は、夏休み期間中にもかかわらず自主的

に印刷、製本作業を地道に行なってきた。西濃地域ボランティア学習大会は、学生の主体性向上や潜在能力を引き出すことができたともいえる。

分析と評価

第1回の開催であり、大学と地域との連携のあり方を明確にすることはできないが、ボランティア団体の実情を把握するためにアンケート調査を行った。

アンケート内容は、エコシステム理論に依拠して開発した地域活動評価ツールの質問内容（192質問）の結果を多変量解析（中川先生の協力）し、30の質問にする。その30質問は、愛知県下助け合い組織、NPO（サンプル200以上）を対象に一次調査を行い、質問内容を見直す工程をとった。（質問内容は添付資料）これらの作業を経て、ボランティアの活動状況に関する32の質問と大会参加への意見に関する3質問の合計35質問項目に整理した。

分析をするあたり、初めに35の質問項目の単純集計を行い、次に回答内容に疑問が生じた質問項目同士をクロス集計で分析を試みた。

発表内容一部紹介



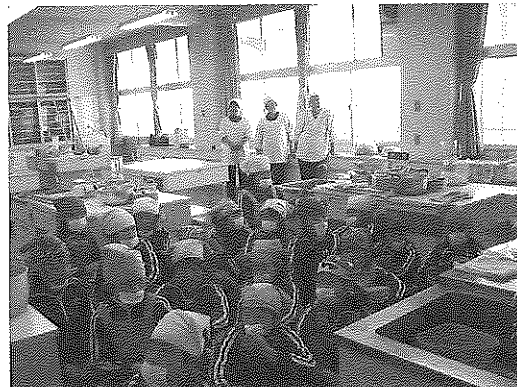
誰もが参加・楽しむこと(車椅子レクダンス)



揖斐高等学校清掃活動の様子



岐阜経済大学 HIGE☆BU 活動紹介
サンビレッジ大垣中川桜まつり



J Aにしみの女性部
小学校での豆腐作り体験



J Aにしみの女性部
子どもたちの農業体験



大垣女子短期大学
発達障がい児へのボランティア



Step by Step
託児ボラでの場面



サンビレッジ大垣
夏休み自由研究



大垣養老高等学校 動物介在ボランティア



大垣ジュニアリーダーズクラブ
駅前での募金活動



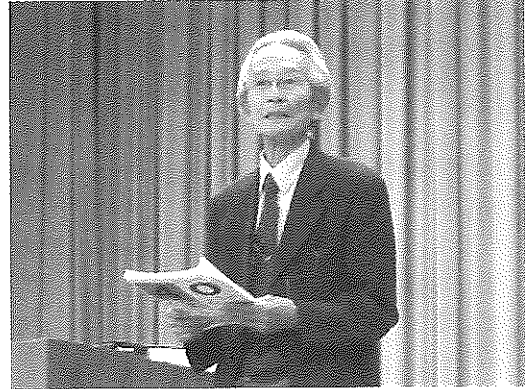
沖縄県人会によるエイサー披露



海津明誠高等学校 配食ボランティア



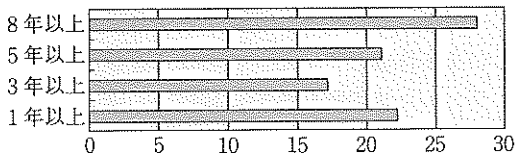
大垣桜高等学校
特別支援学校ボランティア



高森敬久先生による講演
福祉系 NPO とボランティアの独自性

『アンケート結果』回答数103名

- ①参加性別 男 8% 女92%
- ②参加年齢 10歳代28% 20歳代 8% 30歳代
4% 40歳代 7% 50歳代53%
- ③活動経験年数



④地域のボランティア活動へ参加状況

ある程度参加 56% 参加 25%
参加なし、頼まれて、考えたことなし 19%
参加年齢との関係性について、ある程度参加していると回答している割合にほとんど差はないが、40歳代では頼まれて活動しているが多く、活動している、考えたことがないとの順になっている。10歳代は、活動していないが、ある程度活動しているとの回答が次に多く、頼まれて活動しているが全くない。30歳代は、ある程度、活動しているとの回答である。全体的な回答から地域のボランティア活動へは決して積極的でないといえるだろう。活動経験年数との関係性について、活動していると回答しているのは、8年以上の経験者が多く、次に5年以上経験者、3年以上経験者となっている。経験年数に関係なく、ある程度活動しているが多い。参加年齢と同様の

回答内容といえる。

⑤所属団体の活動目的の把握度

把握 51% ある程度把握 43%
参加年齢との関係性について、40歳代は把握していると回答している。10歳代と50歳代に少数であるが考えたことがないと回答している。それ以外、把握、ある程度把握との回答には年代別の差はほとんどない。
活動経験年数との関係性について、参加年齢と違う点は、活動経験年数が多い8年以上に、把握していると回答している割合が多い。40歳代で8年以上の活動経験者は、把握度が高いといえるが、経験年数が少なくなると、ある程度把握している割合が高くなる。

⑥所属団体の活動計画作成状況

年度初め作成 71%
活動する際に作成 23%
参加年齢との関係性について、10歳代、40歳代の少数が作っているか知らないと回答している。30歳代、40歳代、50歳代は、年度始めに作っていると回答している割合が高いが、20歳代、10歳代になると活動する際に作成していると回答する割合が高くなる。問5の「活動目的の把握度」と同様の回答内容であり整合性がある。
活動経験年数との関係性について、活動経験年数が高いほど、年度始めに作成している割合が多くなる。1年以内になると、活動する際に作成している、作成しているか知らない

との回答が増えてくる。

⑦活動内容は地域問題との対応状況

十分対応 21% 対応 61%
 少し、していない18%

所属団体の活動計画作成状況（問6）との関係について、活動する際に作成、年度初めに作成すると回答している方が、地域問題にあまり対応していない、していない、少しはしているとわずかながら回答している。作っていない、作っているか知らないと回答した方は、十分対応している、対応していると回答している。

⑧活動評価の状況

定期的な評価 60% 年1回程度 14%
 考えたことがない 15%

評価する意味がない 11%

所属団体の活動計画作成状況との関係について、年度初めに作成する場合は、定期的な評価をしている割合が高い。他は、評価する方法がわからない、考えたことがないが多い。問7との関連性、地域問題の発掘、振り返る機会や方法についての学習会が必要になる。

⑨他団体との協力状況

常に協力 71% 年1回程度 19%
 方法がわからない 10%

所属団体の活動計画作成状況との関係について、活動する際に作っている、年度初めに作成している場合は、常に協力している割合が高いが方法がわからない、年に1回程度の協力があると回答している割合が次に高い。

⑩学習会への参加状況

年3回以上 38% 年2回以下 16%
 情報があれば参加希望 41%

学習会への参加状況を年代別に調べてみると、50歳代の半数が年3回以上参加している。10歳～20歳代は学習会の情報があれば参加したい回答が半数を超え、また、学習会に参加することを考えたことがないも回答に含まれる。

学習会への参加状況を問3の活動経験年数から調べてみると、3年以上の経験年数の方が年3回以上参加、情報があれば参加したい意

向が強い。1年以上、1年以内では学習会への参加を考えたことがないとの回答があるが、情報があれば参加したい割合は3年以上より高い。

所属団体の活動計画作成状況との関係について、年度初めに作成している場合は、年間3回以上の参加、情報があれば参加したいと回答している。計画の作成状況に関係なく情報があれば参加したいと回答している。

⑪地域問題を把握する工夫状況

年1回の調査 28%
 方法がわからない 26%
 考えたことがない 34%

参加年齢との関係性について、10歳代の6割は考えたことがないと回答している。次の40歳代、30歳代、20歳代と割合は減っているが、考えたことがないと回答している。方法がわからないと回答しているのは、参加年齢に差はみられない。活動目的の作成は、地域問題を把握しないまま、把握する方法がわからないまま作成している。このような状況は、ボランティアの継続性や地域性から考えると解決しなければいけない課題である。

活動経験年数との関係性について、1年以内は、考えたことがないと回答している割合が多い。経験年数に関係なく、考えたことがない、方法がわからないと回答している。必要性がないと回答しているのは、50歳代に少数みられる。地域問題を把握する必要性についての認識はあるが方法がわからない状態といえる。

⑫活動運営への参加状況

常に参加 81% 1回程度 7%
 考えたことがない 7%

参加年齢との関係性について、10歳代は考えたことがないと6%が回答している。20歳代、30歳代に方法がわからないと少数であるが回答しているが、ほとんどのメンバーが主体的に活動運営へ参加している。

活動経験年数との関係性について、10歳代の少数が考えたことがないと回答しているが、活動経験年数に関係なく、積極的に活動運営

に参加している状況である。

⑬活動の財源確保状況

積極的 47% 不足 15%
 考えたことがない 21%
 方法がわからない 13%

参加年齢との関係性について、50歳代は、積極的に工夫していると回答している割合が多い。40歳代では、積極的、不足したとき、方法がわからないが同じ割合の回答である。30歳代は、積極的、不足したとき、考えたことがないが同じ割合の回答である。20歳代、10歳代になると、考えたことがないとの割合が高くなる。10歳代、20歳代は、学校でのボランティア活動が主であることから財源などへの関心が低いと考えられる。

活動経験年数との関係性について、経験年数が多くなると、財源確保を積極的に行っているが、3年以上、1年以上、1年以内になると、考えたことがない、不足したときに考える、方法がわからないと回答する割合が高くなる。

⑭ボランティア活動を家族と話す頻度

週1回程度 25% 月に数回程度 29%
 1年に1回程度 23%
 話したことがない 21%

年代別に調べてみると、10歳～20歳代で考えたことがない、話したことがないが30%を占めている。50歳代が話す頻度が多い。

⑮ボランティア活動を学校や職場で話す頻度

週1回程度 17% 月に数回程度 46%
 1年に1回程度 20%
 話したことがない 15%

年代別に調べてみると、家族よりは話す頻度が増えている。10歳代では話したことがないが多い。

⑯ボランティア活動を近隣と話す頻度

週1回程度 30% 月に数回程度 25%
 1年に1回程度 32%
 話したことがない 7%

年代別に調べてみると、全体的に話す頻度は低い。50歳代の月に数回話すのが比較的多いが近隣とはほとんど会話がされていない状況で

ある。

⑰ボランティア活動を友人と話す頻度

週1回程度 19% 月に数回程度 49%
 1年に1回程度 19%
 話したことがない 10%

年代別に調べてみると、月に数回程度は、50歳代、10歳代が多い。20歳代、30歳代は週1回程度が多い。

⑱町内会のボランティア活動への参加状況

年に2回以上参加 39%
 年に1回程度 37% 情報がない 15%
 考えたことがない 8%

年代別に調べてみると、考えたことがないが10歳～30歳代に多い。情報がないが10歳～20歳代でみられる。40歳代は参加している状況にある。50歳代が年2回以上の参加が多い。

⑲社会福祉協議会へのボランティア活動への参加状況

年3回以上 29% 年2回以下 30%
 方法がわからない 22% 必要がない 10%
 考えたことがない 9%

年代別に調べてみると、考えたことがないと回答した多くは10歳代と40歳代である。必要性がないや方法がわからないは30歳代を除き他の年代にやや均等にばらついている。

⑳町内会のお祭りの参加状況

必ず参加 29% 出来るときに参加 64%
 考えたことがない 5%

年代別に調べてみると、なんらかの形で参加している。若干であるが、10歳～20歳代に考えたことがないと回答している。

㉑近隣に住む多国籍の方との交流

交流していない 44%
 住んでいか知らない 24%
 あいさつ程度 14% 積極的 9%
 考えたことがない 9%

年代別に調べてみると、交流していない、知らない、考えたことがないとの順位になっている。ボランティア活動をしているが近隣の実情を把握していない傾向にある。

活動経験年数から調べてみると、1年以上の経験の方が積極的に交流、挨拶程度の付き合い

いがあると回答している。交流していないが経験年数に関係なく高い。知らないも比較的多い。

⑳町内の環境問題への取り組み状況

ある程度取り組んでいる 48%
あまり取り組んでない 25%
積極的に取り組む 15%
考えたことがない 12%
経験年数から調べてみると、1年以内は考えたことがないがある程度取り組んでいると同数である。経験年数が多くなると、取り組みが増えている。

㉑地域福祉計画策定を知っているか

内容を知らない 47%
知る方法がわからない 19%
考えたことがない 22%
参加したことがある 12%
年代別に調べてみても、行政の情報がほとんど伝わらないといえる。10歳代は考えたことがないが半数以上を占めている。
所属団体の活動計画作成状況との関係について、年度初めに作成している、活動する際に作成している場合、考えたことがないし、内容も知らない、知る方法もわからないと回答している。

㉒居住地域のNPO活動把握状況

考えたことがない 34%
1つ知っている 26%
2つ知っている 15%
3つ知っている 16%
4つ知っている 9%
他団体との協力状況が常に協力71%と高い割合には、居住地域内におけるボランティア活動を知っているのが少ない。
経験年数から調べてみると、経験年数が増えたと考えたことがない割合が低くなる。他のボランティア活動を知らない、知る方法がないといえる。
所属団体の活動計画作成状況との関係について、年度初めに作成している、活動する際に作成している場合、活動内容を知る頻度は高くなるが、考えたことがないと回答するもの

高い。

常に他の団体と連携している割合が71%と高い点で、矛盾している。

㉓地域福祉推進事業を知っているか

内容を知らない 53%
知る方法がわからない 20%
知っている 18% 関心がない 6%
年代別に調べてみても、問23と同様に行政の情報がほとんど伝わらない状況といえる。

㉔小学校区へのボランティア活動参加状況

情報が入ったときに参加 48%
参加方法がわからない 29%
参加している 10%
必要がない・関心がない 14%
年代別に調べてみると、なんらの情報が入った時は参加しているが、10歳代、20歳代、50歳代は参加する方法がわからないと回答している。20歳代、30歳代は関心がないとの回答がある。
経験年数から調べてみると、1年以上の経験者は、参加傾向が多いが、参加する方法がわからない回答は、経験年数に関係なく多い。
所属団体の活動計画作成状況との関係について、年度初めに作成している、活動する際に作成している場合、把握しないために情報が入ったとき参加する方法が多く、コミュニティ活動との連携がほとんどない状況である。また知る方法がわからないとの回答が多い。

㉕保育園や幼稚園へのボランティア活動参加状況

情報が入ったときに参加 47%
参加方法がわからない 33%
参加している 5%
必要がない・関心がない 15%
年代別に調べてみると、問26と同様の傾向がみられる。参加したい意向はあるが参加方法がわからないとの回答が比較的多い。情報が入ったときの参加は、10歳代と50歳代が多い。経験年数から調べてみると、問26と同様の傾向がみられる。情報が入れれば参加したい意向が強い。

所属団体の活動計画作成状況との関係について、問26と同様のことがいえる。

②⑧小学校や中学校へのボランティア活動参加状況

年1回程度 29% 情報が無い 25%
 年2回以上参加している 16%
 必要がない・関心がない 30%
 年代別に調べてみると、20歳代は情報が無いが多い。問26や問27と比較すると必要性が無い、関心がないが増加している。必要性が無いは、30歳代、40歳代に、関心がないは、10歳代、50歳代に回答が多い。

②⑨高等学校へのボランティア活動参加状況

情報が入ったときに参加 22%
 参加方法がわからない 33%
 情報が無い 18%
 参加している 14% 関心がない 13%
 年代別に調べてみると、10歳代を除いて参加する方法がわからない、情報が無いが他の年代にみられる。また、関心がないは、30歳代を除いて他の年代が同じ割合で回答している。

②⑩大学や専門学校へのボランティア活動参加状況

情報が入ったときに参加 21%
 参加方法がわからない 25%
 情報が無い 35% 参加している 7%
 関心がない 12%
 年代別に調べてみると、全体的に問27、問28と比較すると情報が伝わらないが高い割合を占めている。参加したい意向はあるが参加する方法さえわからない状況といえる。

②⑪保健センターや医療機関へのボランティア活動参加状況

情報が入ったときに参加 24%
 参加方法がわからない 24%
 情報が無い 28%
 参加している 16% 関心がない 10%
 年代別に調べてみると、50歳代に情報が入ったときに参加が多いが、全体的に情報が伝わらない、参加する方法がわからない、関心がないと回答している。問23や問25と共通する

点として行政の情報は市民に伝わっていないといえる。

②⑫社会福祉施設へのボランティア活動参加状況

情報が入ったときに参加 49%
 参加方法がわからない 21%
 情報が無い 5% 参加している 20%
 関心がない 5%
 年代別に調べてみると、社会福祉施設関係へは積極的に参加している。社会福祉はボランティアと結びつきやすい点があるのか、10歳代、50歳代に参加する割合が高い。

②⑬大会へ参加しての感想(複数回答可)

活動へ生かしたい 42%
 活動を振り返る機会になった 35%
 内容によっては参考になった 20%
 参考にならなかった 2%
 年代別に調べてみると、10歳代、50歳代に参考にならなかったとの回答がある。50歳代は、今後の活動へいかしたい、内容によって参考になったが同じ割合である。
 経験年数から調べてみると、1年以内は、今後の活動へいかしたい、振り返る機会になった、あまり参考にならなかった回答が同数である。1年以上の経験者は、発表内容によって参考になったが、活動を振り返り、今後の活動にいかしたい。3年以上は、今後の活動へいかすと共に、振り返る機会になったが、発表内容によって参考になった場合とならない場合があった。5年以上は、今後の活動へいかしたい、発表内容によって参考になり、活動を振り返る機会になった。8年以上は、発表内容によって参考になり今後の活動へいかしたい、活動を振り返る機会になった。1年以内、3年以上、8年以上に僅かだが参考にならなかったと回答している。

②⑭大会の内容についての感想(複数回答可)

分野多くてよかった 42%
 気軽に聞けた 23%
 ユニークさがある 19%
 ボランティアの見方が変わった 13%
 テーマを1つにしたほうが良い 3%
 年代別に調べてみると、20歳代はいろんな

野があったがテーマをひとつにしたほうが良い。

30歳代は、いろんな分野あり気軽に聞ける内容だった。40歳代は、いろんな分野あり気軽に聞ける内容でユニークさもあった。10歳代と50歳代は、いろんな分野あり気軽に聞ける内容でユニークさもあったが、テーマをひとつにしたほうが良い回答している。

経験年数から調べてみると、全体的にいろんな分野があり気軽に聞ける内容だった、ボランティアの見方が変わったと回答している。ユニークがあったと回答しているのは、1年以上、3年以上、5年以上の経験年数の方である。テーマをひとつにしたほうが良いは、1年以内、1年以上、3年以上が回答している。

㊥会場運営についての感想（複数回答可）

進行はスムーズ 53%

開催日時は良かった 21%

運営が未熟 11%

バリアフリーが不備 11%

発表事例が少ない 4%

年代別に調べてみると、10歳代は、進行はスムーズであった、開催日時も良かった。20歳代は、進行がスムーズと運営が未熟であるが同数の回答になっている。30歳代は、進行はスムーズである。40歳代は、運営が未熟は最多であり、進行がスムーズ、開催日時は良かったとの順になっている。50歳代は、進行はスムーズで開催日時も良いが、発表事例が少なく、バリアフリーもやや不備、運営も未熟と回答している。

経験年数から調べてみると、1年以内では進行はスムーズで良かったと回答している。1年以上では、進行はスムーズで良かった、開催日時も良かったが運営が未熟と回答している。

3年以上、5年以上、8年以上では、進行はスムーズで良かった、開催日時も良かったが発表事例が少ない、運営が未熟、バリアフリーがやや不備と回答している。

今回の調査は、年代の個数にばらつきがあり信頼性には欠ける点があるが、ボランティア活動の実態をある程度把握できたといえる。その実態は、次の5点に整理することができる。

①活動計画を作成する際、地域の状況を把握できていないこと、把握する方法はわからないこと。

活動は、できること、身近に見える問題から始めていることが想定される。それは、地域問題のひとつであり、ボランティアを始める動機としては評価できる。しかし、活動を継続するとそれだけでは不十分であることに気付いたといえる。つまり、ボランティア活動をとおして地域のさまざまな問題に何とか対応する方法を模索している状態である。

②他のボランティア活動や小学校区の自治会活動との連携が不十分であること。

小学校区の自治会活動以外にも、保育園や幼稚園、小中学校、高等学校、大学のボランティア情報、行政の地域事業が伝わらない状況にある。ボランティア活動の広がりがなくなると、これらの活動は、地域福祉推進の手段ではなく目的になる恐れがある。積極的に、活動と地域福祉との関連性について考える機会を持つことが必要になる。

③ボランティアの高まりや意識の向上はあるが、継続的な学習体系ができていないこと。学びたい希望はあるが、学習の内容、特に地域福祉や地域経済についての学びが少ないように思える。

現在の活動を評価し、新たなボランティアプログラムを作り上げていくような学習会が必要といえるだろう。

④ボランティアをしている当事者は何らかの問題意識を持っているが、家族、友人、会社や学校への影響力が少ないこと。

福祉教育にも同様のことがいえる。小中学校の福祉教育で子どもたちは福祉への関心や目覚めがあるが、大人、親への影響力が少ない。さまざまな偏見や地域機能の希薄さを解消するためにもボランティア活動で得た気付きを共有する学習や方法が必要になってくる

だろう。

⑤ボランティア活動を継続するために必要な財政面に関心が薄いこと。

行政の地域福祉計画や補助金など財政面に関心を持つことが必要になる。つまり継続するには、「ボランティアへの思い」だけでは次世代へ繋げなくなる恐れがある。ボランティア活動経験年数が多くなるにつれて、財源確保への関心が高くなる。地域の企業団体の理解や協力を得ることや団体が活動と事業の二本立てについて前向きに考える必要もあるだろう。

参加して良かった点として、いろんなボランティア活動に触れる機会ができ、「活動を振り返る機会になり、今後の活動へいかしたい」と、活動の充実に努力する声を聞くことができた。また、福祉ボランティアだけでなく、ボランティア広報、食育活動などの報告があり地域社会には多様なボランティアニーズが存在することを学び、「さまざまな分野があり、ユニークさもあり、ボランティアの見方が変わった」などの意見があった。(発表内容の詳細については、西濃地域ボランティア学習大会発表集を参考)ボランティア学習大会を継続することは、上記の5点への対応と、参考して良かった点を地域の福祉力向上へ結び付ける方法が見つかる可能性がある。そこで、具体的な方向性について考えてみたい。

方向性

今大会に参集し、アンケートに回答した方は、何らかのボランティアを実践している。個々の福祉への関心度や意識は高いが、活動と地域社会、地域福祉の課題との関連性や自治会活動との連携、他団体や行政機関との共同は、不十分である。地域住民への波及効果や福祉力向上のためには、個々の回答を総合的に捉えた「地域福祉社会」という視点から検討することが必要になる。

それは、人との学びあいと実践の両面からの支援である。2007年に岐阜経済大学で結成した

「HIGE☆BU サークル」活動の一部を取り上げて説明してみる。

「HIGE☆BU サークル」は、授業が終わった後や週末、夏休みなどに、子どもから高齢者、障がい児者を対象にボランティア活動を展開している。西濃ボランティア学習大会では、実行委員の要になってきた。サークルの学生は、「第7回ソニーマーケティング学生ボランティアファンド」へ「西濃ボランティア学習大会～岐阜県西濃地域にてボランティアに携わる学生を中心としたボランティア学習大会を相互の協力や、地域社会の課題の抽出、地域活動としてのボランティアの振興を図る。」の内容でエントリーし、助成対象に選ばれた。サークルの学生は、地域のさまざまな人と出会い、学び、社会的自律性を身につけてきたといえる。学生の持つ能力が引き出され、発揮するには、大学と地域間の循環・相互交流が太いパイプでスムーズに展開することである。

1年間の「HIGE☆BU サークル」活動の成果がこの必要性を物語っているだろう。

これらの結果を踏まえ、「ボランティア活動の可能性から大学と地域との連携をめざして」次の2点から考察してみたい。

- ①大学と地域との連携・共同の推進には、どのような方法を考えることができるか。
- ②大学の特性を地域で活用し、学生が持つ内発的力を大学、地域で発揮できる仕組みにはどのような方法があるのか。

1点目については、地域福祉の視点「地域性」と「共同性」に着目した大学と地域との交流の具体的な方法を示してみたい。

2点目については、本大学が持つ「福祉・経済・経営」を学生が主体になって地域にアピールする具体的な方法を示してみたい。

「大学と地域との連携・共同の推進の方向性」

西濃地域は、大垣市、海津市、養老郡、不破郡、安八郡、揖斐郡からなる。大垣市に位置する岐阜経済大学は、1967年、地元自治体、産業界、教育界の支援のもと、岐阜県下初の社会科学系の大学として位置づけられている。地域社

会の期待によって設立された経緯から、「地域に有為な人材を輩出する」という建学の精神と「地域との共生」という地域に開かれ地域の発展に寄与する大学として、地域住民の声に積極的に耳を傾けるときである。

園田は、「地域性」と「共同性」について「福祉コミュニティ論における主体は生活者であり、組織化の内実、生活者による生活の場での主体的な組織あるいは住民参加による連帯、市民のイニシアチブ重視、連帯性、利他性、共同性に根ざしたコミュニティ形成を志向」と示している²⁾。そこで、地域性とは「ある一定地域、空間において、そこに居住する人が環境と共存して作り上げてきた固有なもの」であり、共同性とは、「ある一定地域、空間に居住する人々の信条や感情、参加や将来への見通し」と定義しておきたい。

市町村行政や企業との連携は、かなりの実績があるが、地域住民に開かれた大学といえるだろうか。主体は、地域住民、生活者であるという視点がどのような方法で具体化されているか。今回の大会は、ボランティア活動を実際に推進している高校生から社会人の声を聞くことができた。初めの一歩であるが、ボランティア活動の可能性、特に人との学び合いによる「地域課題の共有」は、大会を継続することで「地域住民が必要とする大学」のあり方に関する方向性を示してくれるだろう。

そこで、2008年度の西濃地域ボランティア学習大会開催と長期的な目標を示してみる。

西濃地域ボランティア学習大会は、単年度の事業ではなく長期的な目標を持って開催する。岐阜経済大学西濃地域福祉社会実践支援センター設置は、本大学が持つ機能を十分発揮できるものであり、福祉、経済、経営からスポーツ、情報まで、私たちの生活に密着したプログラムの開発や人材育成、マネジメントまで幅広いシステムを持つ。ボランティアの概念を越えた、地域福祉社会の推進を担う人材育成を研究と実践という両輪で支援するセンターである。次世代へ繋ぐ活動に成熟するには、活動を評価し、団体自らが活動の立ち位置を知ることが必

要になる。岐阜経済大学西濃地域福祉社会実践支援センター設置は、地域に開かれた大学、地域に求められる大学の創造へ寄与できるのではないだろうか。

「大学が持つ福祉・経済・経営を学生が主体になって地域にアピールする具体的な方法」

1998年10月に岐阜経済大学（鈴木誠ゼミ）、大垣駅前商店街振興組合、大垣地域産業情報研究協議会（当時）の3者が共同でJR大垣駅南口の共同ビルの一角（空き店舗）に設置した「まちなか研究室マイスター倶楽部」は、大垣というまち、岐阜という地域をどう活性化していくのか、その課題に岐阜経済大学の学生、地域の多くの人々が一体となって取り組む協働の拠点としての機能を果たし積極的な事業を展開している。マイスター倶楽部に所属するゼミ生は、地域の多くの人と出会い成長しているといえるだろう。

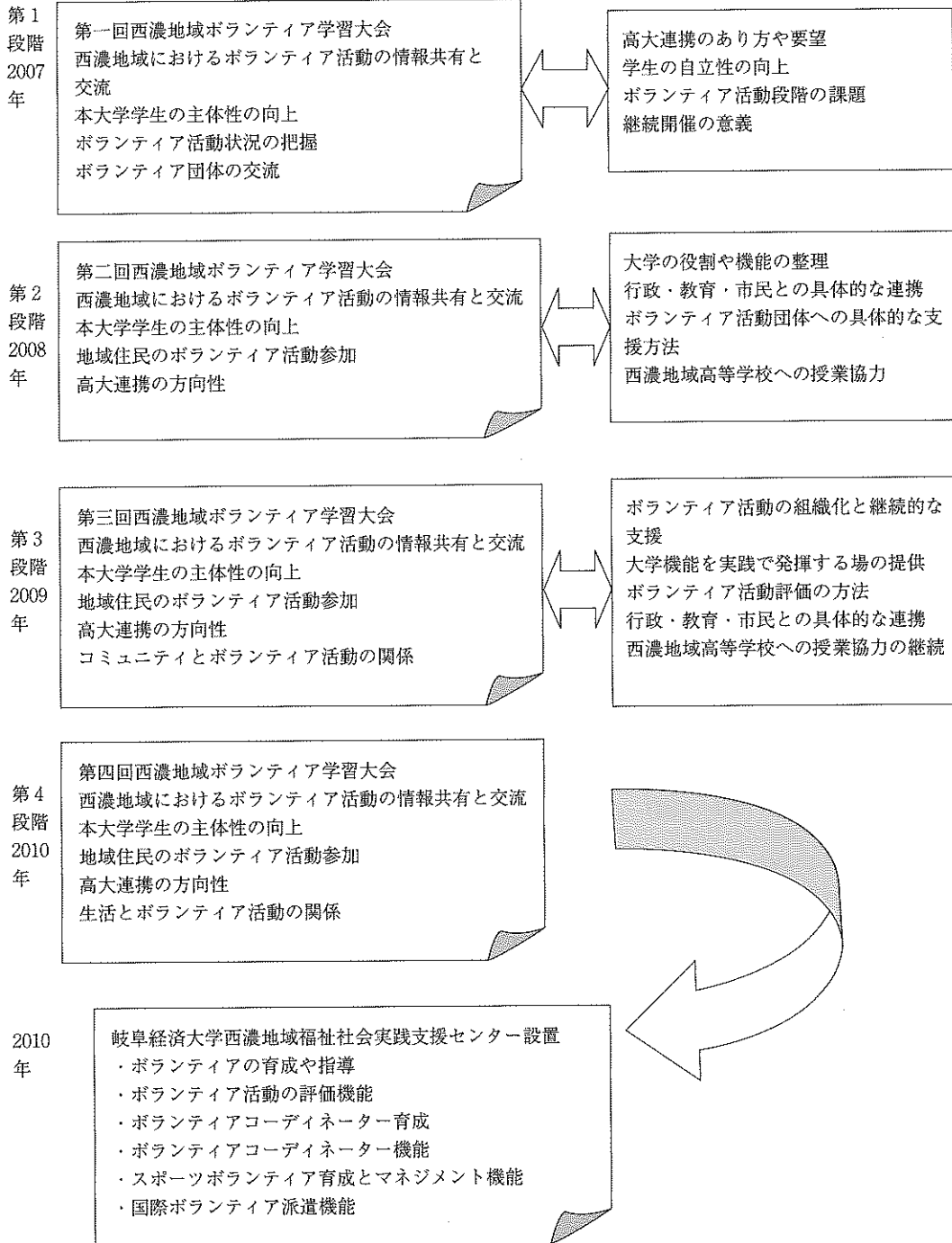
このような機会をより多くの学生が体験するためには、これまで以上の各分野の研究者が地域で授業やゼミを開くことが必要になる。ゼミや授業を街のなかで開講し、地域住民が受講でき、学生と学び合う仕組みづくりである。出前講座やシルバークレッジなどさまざまな事業があるが、市民と学生が共に学び合う場が少なく、継続性から考えると、その成果について評価がされていなければ、単一事業を毎年繰り返しているにすぎないといえる。

学生は、社会状況を理論と実践から学び、卒業後の見通しを考える力を構築する場は、学生が主体となる大学づくり、大学の活性化に結びついてくるだろう。地域にみえる大学づくりを学生が主体になってはじめることを示すものである。

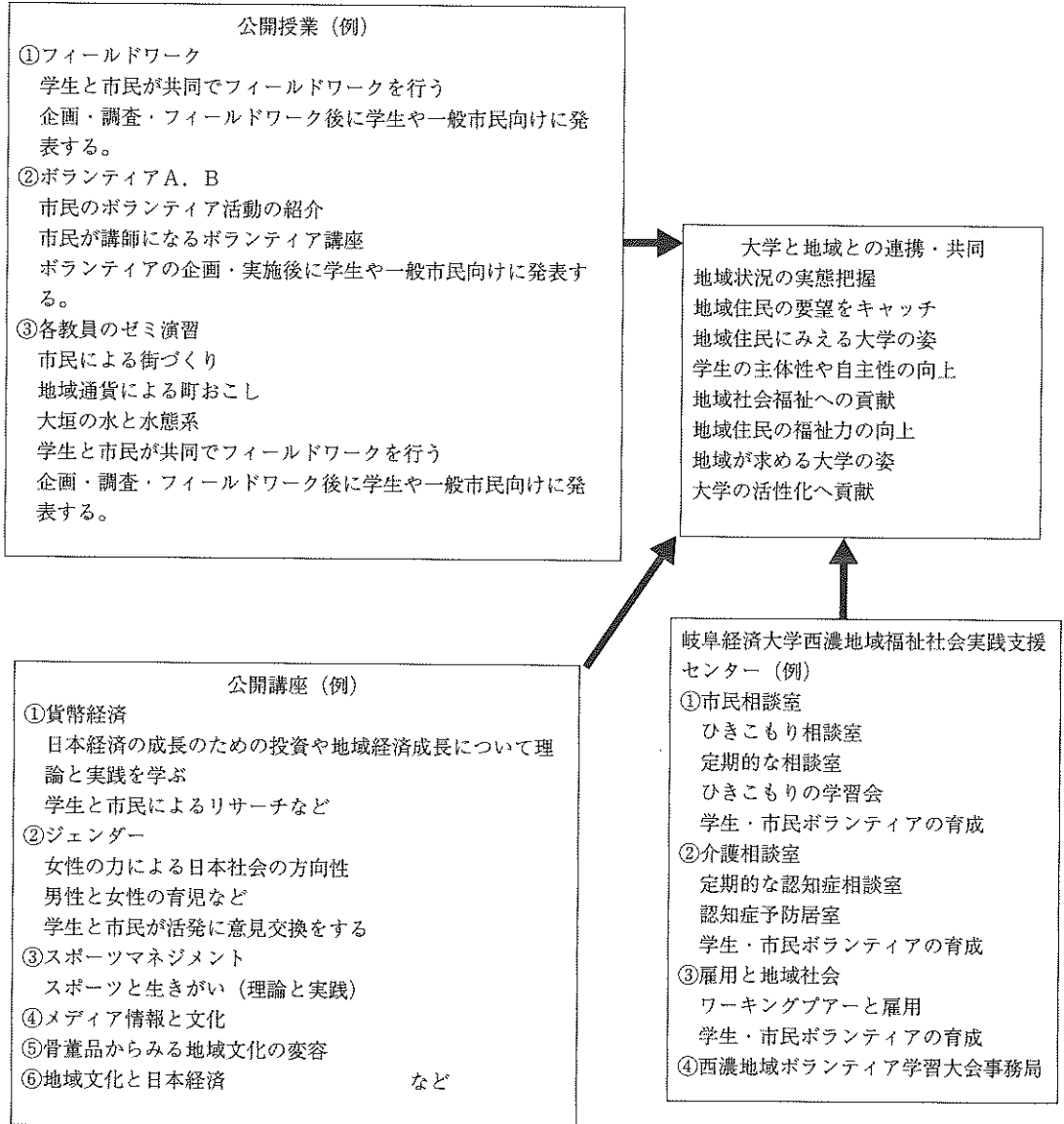
そこで、大学が持つ機能を学生と地域住民が主体になってはじめる方法と長期的な目標を示してみる。

社会人向けには、科目履修制度や聴講生制度があるが、学生との交流は活発に行われているのだろうか。単に受講するだけでなく、大学のさまざまな事業やサークルなどへ参加する仕組

岐阜経済大学西濃地域福祉社会実践支援センター設置



形骸化しつつある商店街を活用し40人程度の収容可能な教室の設置



みが必要である。地域に求められる大学になるためには、学生が社会人履修生や聴講生と積極的に交流できるような「待つ姿勢から動きのある授業」にするべきではないだろうか。

大型ショッピングセンターの出店によって、西濃地域の商店街はシャッター通りになりつつある。本大学の福祉・経済・経営学部は、地域社会に必要なジャンルの研究といえる。学生と住民が街のなかで学び合う場を持つことで、地域住民の要望や地域状況を把握することが可能

になり、学生の主体性や自主性の向上、地域住民の福祉力の向上を期待できる。

また、市民相談室を設置し、相談活動を通して、学生や住民ボランティア育成をすすめ、偏見や差別をなくす地域社会をつくることに寄与できるだろう。3年後、5年後、10年後を予見した地域に開かれた大学の姿である。

「人」が集まったアソシエーションに着目する地域福祉実践は、本来人間関係とは、相互作用的、相互依存的な性質を持っていることを踏

まえて、「人」の関係性から「変容」や「学び合い」を経て「人が本来持つ力」を引き出すという、関係性をポジティブに捉えることである。

高田によれば、「人格的な結びつきや生活の質は相互作用的、相互依存的なものである。社会福祉は生きているものが織りなすことの力動・自己組織性に注目する必要があるだろう。

(中略) 生きている人間が生きている環境の中でどのような生活をしているかを考察することである。これは地球や世界、また組織や人間を二元論や要素還元・固体還元主義で捉えるのではなく、関係論的な観点から捉えなおすことであろう。この根底にあるのは「共生」概念である」。²⁾

地域福祉実践を展開するアソシエーションは、その内部で課題を抱えていることに目を背けてはいけない。アソシエーションの内実化に着目することは、空洞化・形骸化しているといわれる自治会・町内会などのへの支援方法を示唆することになるだろう。

福祉コミュニティ形成における「組織(アソシエーションなもの)」を住民の個々の意志を融合し昇華する組織体と捉え、コミュニティを媒介とした問題解決意志の発現形態として位置づけることで、新たな分析視角とすることができるとし、組織がコミュニティを特徴づけると同時に、組織の地域的发展が福祉コミュニティの成熟につながる立場に立つ。(中略)「共同性」や「連帯性」といった組織の共通基盤となる概念の解明が期待されている。³⁾

今後、高まるであろう参加型社会システムへ住民がどのように参加するかが問われている。このような中で、アソシエーションといわれるものが地域福祉の成熟にどのように結実していくか、まさに、地域福祉援助技術の方法を実践で使えるものとして提示する時期であろう。

2008年度の西濃ボランティア学習大会は、地域住民、高校生、障がい者、HIGE☆BU、当大学学生からなる実行委員会を結成し、地域に求められる大学の姿に近づいていきたいと考えている。アンケートの内容については、中川先生の協力を得ながら、信頼性の持てる調査を継続

していききたい。

本報告書は、西濃地域ボランティア学習大会の総括を担当した樋下田が中心に執筆した。その過程では、佐藤、山田(武)の両先生から内容へのご意見や緻密な校正など、多大なるご尽力を頂きまとめることができた。

最後に、西濃地域ボランティア学習大会実行委員で活躍した学生に、大きな拍手を送ると共に、励まし支えて頂いた木村先生、佐藤先生、山田(武)先生、高橋(正)先生に心から感謝します。

西濃地域ボランティア学習大会実行委員会名簿

学年	役割	氏名
5	委員長 (広報)	佐藤貴則
3	運営企画	菱田広誌
3	広報 (HIGE☆BU)	伊藤祐子
3	運営企画 (HIGE☆BU)	桐山加代子
3	広報 (HIGE☆BU)	幸地香奈子
3	会場運営 (HIGE☆BU)	谷口喜一
3	会場運営 (HIGE☆BU)	堀あゆ美
3	会場運営 (HIGE☆BU)	渡邊貴文
2	広報	足立健太
2	運営企画	橋本将志
2	会場運営 (企画)	藤井靖高
2	会場運営 (企画)	平野正大
2	広報 (HIGE☆BU)	高田美幸
1	運営企画 (HIGE☆BU)	小田純樹
1	運営企画 (HIGE☆BU)	西杉山裕樹
3	委員長 (運営企画)	上木裕也
3	会場運営	木本正博

学部	役割	氏名
経済学部	総括	樋下田邦子
経済学部	企画担当支援	木村隆之
経済学部	会場担当支援	佐藤俊幸
経済学部	広報担当支援	山田武司
経営学部	企画担当支援	高橋正紀

ボランティア学習大会アンケート (資料)

地域福祉活動における連携や協働に関する調査

このアンケートは、別紙の目的に利用し、今後のボランティア活動の発展のために使うものですので、実態をご記入ください。

設問1～36まであります。全ての設問に漏れなく記入ください。

下記の設問について、該当する番号をHBまたは、Bの鉛筆でマークしてください。

番号	質問分野	質問内容	5段階評価
設問1	属性	あなたの性別は？	①男 ②女
設問2	年齢	あなたの年代は？	①10歳代 ②20歳代 ③30歳代 ④40歳代 ⑤50歳以上
設問3	活動年数	あなたは、現在の活動を始めて何年になりますか	①1年以内 ②1年以上 ③3年以上 ④5年以上 ⑤8年以上
設問4	活動意識	あなたは、地域のボランティア活動へ参加していますか	①自主的に活動している(自分から情報を収集する) ②ある程度自主的に活動している(情報があれば活動する) ③あまり自主的に活動していない(情報があっても数回活動する) ④頼まれて活動している(情報を自分から把握しない) ⑤考えたことがない
設問5	ミッション	あなたは、所属する団体や組織の活動目的を把握して参加していますか	①把握して活動している ②ある程度把握して活動している(情報を把握する気がある) ③あまり把握していない(情報を把握する気はあまりない) ④把握しないで活動している(情報に関心がない) ⑤考えたことがない
設問6	活動計画	あなたの所属団体や組織は活動計画を作っていますか	①年度初めに計画を作っている ②活動する際で作っている ③作っていない ④作っているか知らない ⑤考えたことがない
設問7	活動内容	あなたは、所属する団体や組織の活動内容は地域問題に対応していると思いますか	①十分対応していると思う ②対応していると思う ③少しは対応していると思う ④あまり対応していないと思う ⑤対応していないと思う
設問8	活動評価	あなたの所属団体や組織は活動を定期的に評価していますか	①年1回以上定期的に評価している ②これまでに1回程度なら評価したことがある ③評価したいが方法がわからないのでしていない ④評価する意味がないので評価していない ⑤考えたことがない
設問9	連携	あなたの所属する団体や組織は他の活動団体と協力していますか	①常に協力して活動している ②これまで1回程度協力して活動したことがある ③協力したいが方法がわからない ④これからも協力をしないで活動する ⑤考えたことがない

設問10	学習	あなたは、団体内外を通して活動を充実するために学習会に参加していますか	①年間3回以上の学習会に参加している ②年間2回以下の学習会に参加している ③情報があれば参加したい ④学習会に参加する気はない ⑤考えたことがない
設問11	地域課題	あなたの所属する団体や組織は地域の福祉問題を把握する工夫をしていますか	①年に1回の地域調査をしている ②2年に1回の地域調査をしている ③地域調査したいが方法がわからない ④地域調査の必要性がないのでやっていない ⑤考えたことがない
設問12	運営	あなたは、所属団体や組織の活動運営に参加していますか	①常に参加している ②1回程度参加したことがある ③参加する方法がわからない ④参加する必要性がない ⑤考えたことがない
設問13	財源	あなたの所属団体や組織は、活動の財源確保のために何か工夫していますか	①助成金等の活用を積極的に行っている ②財源が不足したときに工夫している ③確保したいが確保する方法がわからない ④財源確保に工夫しているか知らない ⑤考えたことがない
設問14	家族	あなたは、家族とボランティア活動について話し合うことはありますか	①週1回以上話す ②月に数回話す ③1年に1回程度話すことがある ④話したことがない ⑤考えたことがない
設問15	友人	あなたは、ボランティア活動について学校や職場以外の友人と話し合うことはありますか	①週1回以上話す ②月に数回話す ③1年に1回程度話すことがある ④話したことがない ⑤考えたことがない
設問16	近隣	あなたは、近隣の方とボランティア活動について話し合うことがありますか	①週1回以上話す ②月に数回話す ③1年に1回程度話すことがある ④話したことがない ⑤考えたことがない
設問17	会社	あなたは、職場や学校等（授業も含む）で友人とボランティア活動について話し合うことはありますか	①週1回以上話す ②月に数回話す ③1年に1回程度話すことがある ④話したことがない ⑤考えたことがない
設問18	小地域内	あなたは、町内会のボランティア活動へ参加したことがありますか	①年に2回以上参加している ②年1回程度参加している ③参加したいが情報がない ④参加する必要性がない ⑤考えたことがない

設問19	社会福祉協議会	あなたは、社会福祉協議会のボランティア活動へ参加していますか	①ボランティア連絡協議会に属して年3回以上参加している ②ボランティア連絡協議会に属して年2回以下参加している ③参加したいが方法が分からない ④参加する必要性がない ⑤関心がない
設問20	祭り	あなたは、町内のお祭りに参加したことがありますか	①必ず参加している ②参加出来るときだけ参加している ③参加する方法がわからない ④参加する必要性がない ⑤考えたことがない
設問21	異文化	あなたは、近隣に住む他国籍の方と交流がありますか	①積極的に交流している ②挨拶する程度の付き合いはある ③交流していない ④近隣に住んでいるか知らない ⑤考えたことがない
設問22	環境	あなたは、町内の環境問題に何か取り組んでいますか	①定期的に行動し積極的に取り組んでいる ②町内の仕事としてある程度取り組んでいる ③町内の仕事でもあまり取り組んでいない ④取り組む必要性がない ⑤考えたことがない
設問23	地域福祉計画	あなたは、行政の地域福祉計画策定を知っていますか	①よく知っていてワークショップに参加したことがある ②聞いたことがあるが内容は知らない ③知る方法が分からない ④知る必要性がない ⑤考えたことがない
設問24	NPO	あなたは、居住地域におけるNPOの活動の内容をいくつ知っていますか	①4つ以上の内容を知っている ②3つの内容を知っている ③2つの内容を知っている ④1つの内容を知っている ⑤考えたことがない
設問25	市町村	あなたは、市町村の地域福祉推進事業を知っていますか	①事業内容を知っている ②聞いたことがあるが内容は知らない ③事業を知る方法が分からない ④知る必要性がない ⑤関心がない
設問26	小学校区(小地域)	あなたは、小学校区のボランティア活動を知っていますか	①よく知っているので参加している ②情報が入ったときに参加している ③知る方法が分からない ④知る必要性がない ⑤関心がない
設問27	保育園や幼稚園	あなたは、幼稚園や保育園のボランティア活動へ参加していますか	①よく知っているので参加している ②情報が入ったときに参加している ③参加する方法が分からない ④参加する必要性がない ⑤関心がない

設問28	学校	あなたは、学校（小中学校）でのボランティア活動（授業を含む）へ参加したことがありますか	①年に2回以上参加している ②年1回程度参加している ③参加したいが情報が無い ④参加する必要性が無い ⑤考えたことが無い
設問29	高等学校	あなたは、高等学校のボランティア活動へ参加していますか	①よく知っているので参加している ②情報が入ったときに参加している ③参加する方法が分からない ④参加する必要性が無い ⑤関心がない
設問30	大学・専門学校	あなたは、大学や専門学校のボランティア活動へ参加していますか	①よく知っているので参加している ②情報が入ったときに参加している ③知る方法が分からない ④情報が伝わって来ない ⑤関心がない
設問31	保健医療機関	あなたは、保健センターや医療機関のボランティア活動へ参加していますか	①よく知っているので参加している ②情報が入ったときに参加している ③知る方法が分からない ④情報が伝わって来ない ⑤関心がない
設問32	社会福祉施設関係	あなたは、社会福祉関係施設のボランティア活動へ参加していますか	①よく知っているので参加している ②情報が入ったときに参加している ③参加する方法が分からない ④参加する必要性が無い ⑤関心がない
設問33	ボランティア大会	今回のような大会に参加しての感想をお聞かせください（複数回答可）	①参考になり今後の活動へ活かしたい ②活動を振り返る機会になった ③内容によっては参考になった ④あまり参考にならなかった ⑤参考にならなかった
設問34	ボランティア大会	今回の大会の内容はどうでしたか（複数回答可）	①いろんな分野の内容があった ②内容のユニークさがあった ③気軽に聞ける内容であった ④ボランティアの見方が変わった ⑤発表テーマをひとつにした大会がよい
設問35	ボランティア大会	今回の大会の会場運営はどうでしたか（複数回答可）	①会場の進行はスムーズであった ②開催日時は良かった ③発表事例数が少なかった ④バリアフリーはなっていた ⑤全体的に運営が未熟である
設問36	その他	ご意見ご希望・ご感想をお聞かせください 次回の開催に向けての要望など	

皆さんのご協力で無事終了することができました。ご協力ありがとうございました。

註：

- 1) 園田恭一編「社会福祉とコミュニティー共生・共同ネットワーク」87項 東信堂 2003年
- 2) 高田眞治「社会福祉内発的發展論」 156頁 ミネルヴァ書房 2003年
- 3) 園田恭一編「福祉コミュニティー共生・共同・ネットワーク」96頁 2003年 東信堂

